

夏頃から始めた年長さんとの哲学対話。お昼寝の間に年長さんだけ集まって、30分程度、ほぼ毎日継続してきました。最近は始める前に歌を歌ったり、クイズをしたりするので1時間近くになっています。

「哲学対話」では、最低限のルールとして、以下の5つをみんなで毎回確認してから始めています。

- ① ボールをもっている人が話す(自分の考えを言う) ※ボールとは大きな毛糸のボンボンみたいなものです。
- ② ボールを渡されても何も言わなくてもいい
- ③ ボールを持っている人が話をしているときは、しっかり聴く
- ④ ボールを持っている人が考えているときは待つ
- ⑤ 人の嫌がることはしない(言わない)

始めたばかりの頃は、その日のテーマについて、「どう思う?」とボールを渡しても、「知らん」「わからん」とか、恥ずかしくなって黙り込んだり、全然ピント外れな答えをだらだらとただしゃべり続けたり、「哲学対話したくな〜い」という子もいたりしたのですが、最近は、「今日も哲学対話ある?」「やったー!」「今日は〇〇について話したい!」ととても楽しみにしている子が増え、中身もちょっとずつ哲学対話らしくなってきたように感じています。

この哲学対話では、結論を出したり、みんなの答えをまとめたりはせず、まずは「何を言ってもいい(言わなくてもいい)」、「正しい答えを言う必要はない」、「何を訊いてもいい」し、「いろんな答えがあっいい」ということを体験してもらえたらと思い、それぞれ自分の考えていることを安心して出せるように、とにかく、子どもの発言を否定することなく、ひたすらしっかり聴いて受け止めるよう努めてきました。そして、発言してくれた子には「ありがとう」という気持ちで、発言はしなくても、考えていること自体を認めるようにしてきました。その甲斐あってか、少しずつですが、「いろいろ考えることが楽しい」「自分の考えを他の人にも知ってもらおうことがうれしい」「感じ方、考え方は人によって異なる」「違いをおもしろいと感じる」ようにもなってきたのではないかと思います。

そもそも「哲学対話」というネーミングが仰々しいですね。梶尾真司さんという方が『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』(幻冬舎新書)のなかで書いておられるのですが、無理に哲学的にする必要はなく、とりあえずやってみて回数を重ねることが大事。研究者や専門家が行うようなハードルの高い「知識として学ぶ哲学」である必要はないのです。体験としての哲学、互いに問い、考え、語り、聴くこと。哲学対話とは、つまり、「ともに考える」という営みであり、突き詰めれば「ともに生きること」でもあるのです。

野球などでもそうですが、知識、技術を備えたプロでなければできないというわけではなく、見よう見まねで自分たちが楽しむための草野球のような感覚で「草哲学(哲学対話)」でいいんだと思っています。

さまざまな問題が山積する世の中。子どもたちはこれからの人生で、簡単には答えの出ない問題にぶつかることもたくさんあるでしょう。そんなときに「考えることをあきらめない人」に、「むずかしいテーマにぶつかったときほど、考えることを楽しめる人」に育ってほしいなと思います。

つくしさんは、まもなく保育園を旅立っていきますが、ぎりぎりまで哲学対話を楽しみたいと思っています。